

第12回 龍頭が滝案内

松笠と龍頭が滝、そして出雲神楽（その3）

前回は、滝神社では、旧暦10月8日の祭礼に湯立神事が行われていた、と紹介しましたが、万九千神社（出雲市斐川町）では、今でも湯立神事を見ることができます。

旧暦10月になると、日本中の八百万神（やおよろずのかみ）が出雲へ参集されます。参集された八百万神が、出雲の国を去られるにあたり、最後に万九千神社にお立ち寄りになり、神議の締め括りと直会（なおらい）を催される、といわれています。

万九千神社では、旧暦10月26日に、まず、「湯立神事」行いすべてのモノ、コトを祓い清めます。その後「神殿祭」を行い、たくさんのお供え物をして神々をもてなします。最後に、日没頃に宮司が社殿の御扉を梅の小枝で叩きながら、「お立ち、お立ち、お立一ち」と三度唱え、明朝未明のお旅立ち（「神等去出」からさで、といいます）の時間が近づいたことをお知らせします（これを「神等去出神事」といいます）。令和5年は、12月8日が旧暦10月26日にあたることから、この日の夕方から湯立神事、神殿祭、神等去出神事が行われました。

（写真1）のように、竹と縄で结界を張り、湯立場を作ります。広さは、縦約5m、横約4m。お神酒、野菜、剣、女竹などが供えられた祭壇と、中央には湯釜が置かれます。この湯釜に火が入れられ、お湯にお酒と塩が注がれます。湯立場には10人近くの神職が並び、笛と太鼓に合わせこの湯釜の周りを舞いながら、塩湯の神威を高めていきます（写真2）。最後に、神職が湯笹をもって湯釜の塩湯を振りまき、その場にあるモノとコトすべてを祓い清め（「奉湯」）、神事は終了です。湯立神事が始まるのは夕方5時ですが、冬の夕暮れは早く、白い装束が照明で浮き上がって見えて、とても幻想的な趣があります。所要時間は約1時間です。

万九千神社の湯立神事は、少なくとも宝暦14（1764）年までさかのぼることができるそうです。明治維新以来途絶えたそうですが、平成29年に再興されました。

龍頭が滝でもこのような湯立神事が行われたのでしょうか、舞手は誰？場所は？目的は？見物人はいたのか？いろいろ興味が湧きますね。



写真1



写真2